

飯田地方における盆行事

荻野千鶴子・中田明美

The Bon Festival of the Iida District

C. OGINO and A. NAKATA

はじめに

人間は労働と休息とを繰り返して日常生活を送っているが、その折り目として毎年同じような習慣的な営みが行なわれる。そのような伝承的行事を、年中行事という。特に米作りの盛んなわが国では農耕儀礼との関係も深く、また神仏への信仰とも相まって、世代ごとに継承されてきた。しかし、近年経済機構の変遷や信仰心の後退、核家族化等によって急速に失われつつある。この時にあたり、過去3年間愛知県北設楽郡の年中行事の調査を行なったので、それと比較するため、文化の交流のあったと思われる飯田地方の盆行事について報告する。

方 法

調査期間は、昭和57年7・8月に古老への聞きとり調査を行なった。また現地の図書館で郷土史等資料収集をし、行事当日現地に行き、写真撮影をした。

結果および考察

1. 飯田市の概要

飯田市は伊那谷の南部に位置し、天竜川をはさんで東と西に広い河岸段丘が広がっている。そして、東に赤石山脈、西に木曾山脈を望む小さな盆地にある、人口8万弱の小さな都市である。昔から小京都等といわれ、碁盤の目のように町並が整った、飯田城の城下町から発展したかつての飯田町と、飯田の西に隣接する上飯田町があり、その後3回にわたって合併した11か村（新市）が含まれている。

新市は大部分が農村で稲作中心である。かつては養蚕農家が多く多量の繭を産し、飯田紬の産地としても知られているが、その桑畑の多くはリンゴやナシの果樹園にかわりつつある。手工業としての元結、水引も機械化され、今もなお盛んである。全市にわたり、公害のない田園工業都市の構想のもとに、木工業・繊維工業・各種精密工業・食品加工業等工業化が進んでいる。

北設楽郡とは、根羽—平谷—波合—駒場を通る三州街道によって結ばれ、塩・魚貝類等の物資とともに、文化の交流も盛んに行なわれていた。

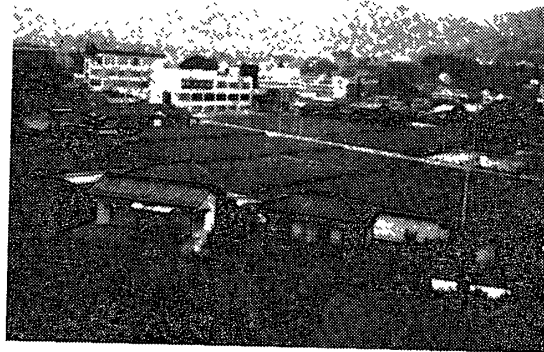


図1 飯田市

2. 盆について

盆（盂蘭盆会）の起源は周知の通り、釈迦の弟子目蓮の死んだ母親が、餓鬼道に落ちて苦しんでいるとき、師の助けを請い、7月15日に供養したのが始まりとされている。わが国では、606年（推古天皇14年）に、毎年7月15日に各寺に齋（僧の食事）を設けたのが初めて、657年（齐明天皇3年）には飛鳥寺で盂蘭盆会が行なわれた。一方古来民間では、1年の後半第1期の満月、すなわち7月15日を中心に、先祖祭を行なってきたが、中世にはその魂祭が盂蘭盆に集合したのである。

この地方としては、霊界から帰ってきた祖先の霊を慰め、家の出来事等を報告し、ごちそうを作ってもてなすのである。

3. 盆の期間

盆の期間は、一月おくれ、つまり8月13日から16日までである。明治5年（1872）に太陰暦に代わって太陽暦が用いられるようになったが、飯田地方ではそれ以前から8月盆であった。これは、養蚕がこの地方の主産業の一つであり、7月は繭の出荷の最盛期であるから、ゆっくり祖先の霊を迎えている時間がないためである。また、寒い地方であるため、仏様に供える野菜や果物が充分とれないし、ミソハギ、キキョウ等の盆花も咲かないからである。

4. 盆月

8月1日は、仏様が西国を出発する、とって迎え火をたく所もあるが、多くは新盆の家で家紋入りの提灯を軒下に吊す程度である。（図2）また、親戚の者は盆月に入ると早々に、新盆のお飾りに使う灯籠や提灯を贈る。

5. 墓掃除

7日にお墓をきれいに掃除する。竹を切って新しい花立てや線香立てを作り、古いものは杉の枯葉等と一緒に燃やした。花立ての水をそのままにしておくと、蚊が増えて衛生上好ましくない、ということで、昭和25年（1950）頃からあまり作られなくなり、作っても水がぬけるようになっている。

6. 盆花迎え

12・3日頃になると、昭和30年（1955）頃までは子供達が山へ盆花を取りに行った。キキョウ・オミナエシ・ミソハギは必ず供えるが、その他ユリ等季節の花を添える家もある。今では市販の花も多く使われている。また、お棚に敷くススキかカリヤスを刈ってきて、ワラで結んで盆ゴザを編む。13日にススキやカリヤスを刈ると仏様の足を切るからいけないと決してしなかった家もあるが、13日と決めていた家もあった。

7. 盆棚作り

北設楽郡では盆棚を「施餓鬼棚」ともいい、図3のように仏壇の前に机を出して飾ったり、縁側や外に棚を作る。また軒下に吊す所もある。（図4）飯田では「お棚」といい、外には作らず座敷の床の間に台等を置いて作る。（図5）そして両地方ともススキかカリヤスのゴザを敷く。飯田地方ではこの端を垂らしておくと、餓鬼がそれにすがって盆棚にのぼるといふ。そしてその上に里芋の葉を敷くが、桐の葉も使われている。大きな生の葉を敷く事は、線香やろうそく

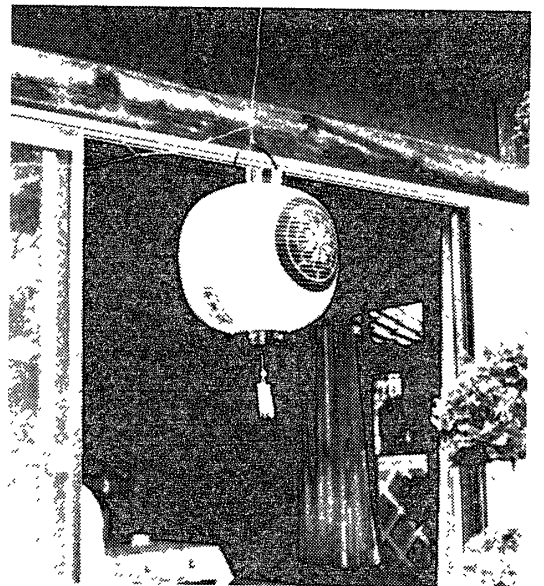


図2 新盆の家の提灯

が倒れても火がつかない，という点で理にかなっている。

仏様を招く為に，位牌は仏壇からすべて出しお棚の上に並べるが，位牌の多い所では掛軸に戒名を書いてそれをまつ。また，小さい仏像を置き，お経を書いた掛軸もかける。

取ってきた盆花を大きな花瓶にさして両脇に飾り，できるだけ賑やかにする。

8. 迎え火

13日の夕方，日がかげってから迎え火をたく。たく場所は門先が殆どで，お墓と門先の両方でたく所もある。中には13・14・15日と毎晩たく家もある。北設楽郡ではアカシ（松の根）を使い，松明を上にかざしてたく所もあるが，飯田は稲作が中心であるため，よくワラが使われる。（図6）また，養蚕をしている家では，「カセ棒」といって桑の棒をたく。昭和6年（1931）頃まではアカシも使われていた。仏様は迎え火の煙にのって家に来る，とか，火を目印に来る，等といわれる。

仏様を迎えた午後6時頃，わかしておいた風呂に新しい石けんと手ぬぐいを用意し，「どうぞお入り下さい」と招く。長い旅の疲れをいやしてもらおう，という意である。

9. 供え物

13日の晩には，^{ウルチ} 粳米の粉を水でねって「迎えだんご」を20個作り，三角錐になるように積む。最近では，赤・緑等の色をつけた落雁でだんごを積んだ形にしたものが市販されている。そのほか「おちつきの餅」といって，お餅をつく所もある。また，ゆでたそうめん・リンゴ・梨・桃・スイカ・とうもろこし・菓子類を供える。器は仏様用の漆器のお膳が決まっております。それに供える。

「仏様の口が渴かぬように」と，鉢に里芋の葉をしいて角切りのナスを入れ，水を入れた鉢にミソハギの花をそえて，おまいりする時にミソハギで水向けをする。（図7）これは寺施餓鬼の供え物の「百味供」が簡略化され，家庭でも行なわれるようになったものである。僧侶が棚経をあげる時に，ミソハギで鉢の水を直接位牌にかけて拝む所もある。北設楽郡ではこの他に，小さい根づきの里芋を必ず供える。

無縁仏へは，膳の下に一皿供えたり，別に小さい棚を作って供えたりする。また，特に供え物をしなくても，供えたお茶を餓鬼の為に外に捨てる。

家族の夕食は，「盆歳を取る」といって，白い御飯にナスや焼きふのすまし汁・魚（鯖・ます・

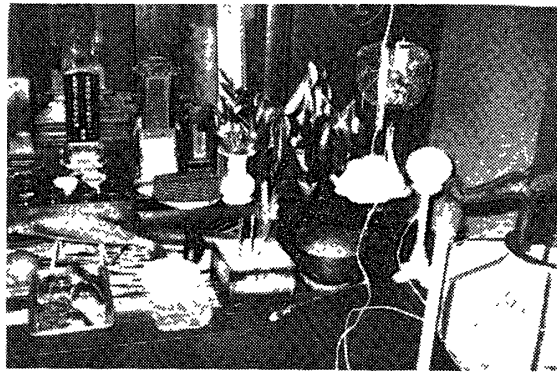


図3 施餓鬼棚（北設楽郡）

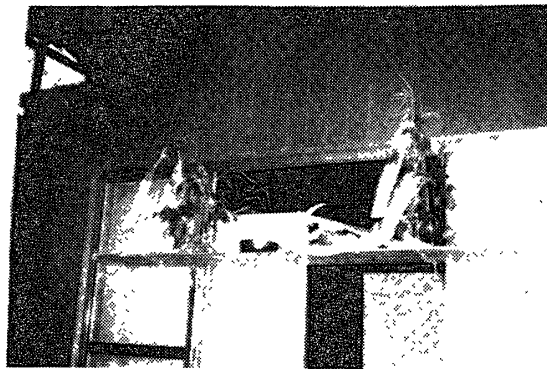


図4 吊り棚（北設楽郡）

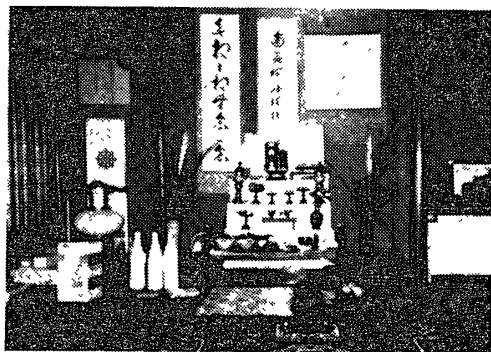


図5 盆棚

鮭等)・煮物(カボチャ・コブ・ナス等)を食べる。魚を食べるのは精進落としの意味も含まれるが、都会から帰って来た親戚と共にごちそうを囲み、祖先の霊をまつるのである。

15日の夕方は仏様がお帰りになる前夜なので、ごちそうを多くし、送りだんごを米の粉で作る。仏様の乗り物として、ナスを牛、キュウリを馬に見立て、とうもろこしの毛で尾をつけるが、北設楽郡ではナスを馬に見立て、キュウリの馬をあまり作らない。昭和20年頃までは麻ガラで足をつけたが、今は割り箸を使う。そして、そうめんを2〜3すじつけてくらかけをする。

また、お土産に持たせる、とって栗のいが、柿、くるみ等の青い実のついた枝を供える。(図8)

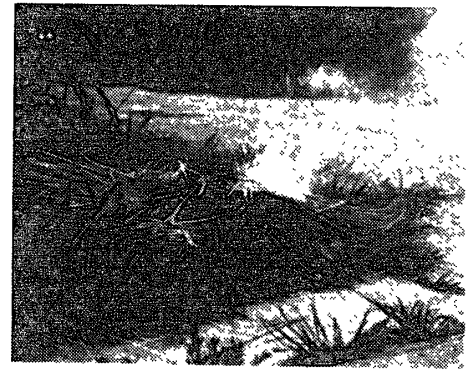


図6 迎え火(ワラ)



図7 供え物



図8 供え物

その他、盆中の供え物は、まんじゅうの天プラ(直径5〜6cm位の甘みの少ないまんじゅうで、盆が近づくと天プラ用として市販される)・ぼた餅・のりまき・煮物・うどん等で、毎食事ごとにかえる。一例として、三穂・伊豆木のN氏宅(禅宗)の供え物を次にあげる。

13日晚 迎えだんご 御飯 すまし汁 天プラ(エビ、まんじゅう等) カボチャの煮物
桃 リンゴ お菓子

14日朝 御飯 やきふの味噌汁 ささげ 漬け物

昼 ちらしずし

晩 うどん

15日朝 御飯 油あげの味噌汁 漬け物

昼 五目御飯

晩 送りだんご ぼた餅 ナスの牛とキュウリの馬 栗 くるみ

16日朝 御飯 ナスの味噌汁 漬け物

13日の晩は霊界から帰ってきた労をねぎらうために、15日の晩はまた長い旅に出発する祖先を励ますために、供え物が多くなっている。盆の起源が餓鬼道に落ちた者を救うための供養であったことから、このようにさまざまなごちそうを作って、祖先の霊を慰めるのである。

10. 棚経

13〜15日の間に寺の僧が、壇家を一軒一軒まわり、お経をあげる。最近では盆の期間中にまわりきれないので、13日より前にまわり始める所も多い。僧への御布施は500円〜2000円位で

ある。

11. 墓参り

墓参りには、14・15日のうち1回行く家、両日とも行く家等さまざまであるが、仏様を家に迎えていても、行く家が殆どである。お盆には他の地域へ行っている親戚も帰ってくるので、墓参りをするのであろう。線香・ろうそく・花・水・米、そして寺施餓鬼の時にもらってきた施餓鬼旗を持っていってお参りする。

12. 送り盆

16日の早朝、仏様を送り出す。送るのは早い程良い、といい、15日の真夜中に行く家もあった。ススキで編んだゴザで供えた物や野菜の馬、栗、くるみ等を包み、川端やお墓へ持っていく。(図9)昭和30年(1955)頃までは川へ流していたが、川が汚れて衛生的に良くない、ということで、今は川端においてろうそくと線香を供える。「また来年おいで下さい。」と言ってお参りする。



図9 精霊送り

北設楽郡では川へ持っていった供え物を子供達が集め、川原で飯をたく「川原めし」があるが、この地方では行なわれない。

16日の朝食は、仏様に口をなめられないように、と精進落としの意味から、ます等の魚を食べる。また、川へ供え物を流して仏様を送る為、仏様に連れていかれる、とってこの日から子供は川に入って水遊びをしてはいけないという。

13. 盆踊り

盆踊りは8月14日か15日に神社や寺の境内で行なわれる。旧飯田市では13～15日までの3日間、市街の中央広場で行なわれる。伊那節や竜峡小唄・木曾節、その他各地の民謡が流れ、老若男女が一つの輪になって踊り明かす。

14. 新盆

新盆の盆棚飾りは一般と同じであるが、供え物が多く、提灯や切り子灯籠等が美しく飾られる。(図10)

13日か14日の夕方、親戚・組合の人達が新盆見舞に集まり、念仏を唱えた後酒宴を開く。

108の松明を昭和初期頃までは墓から家の前まで立てたが、今は簡略化されて、ろうそくを竹に1本ずつ、または何段かの板につけて立てる。砂山に線香を何本も立てる所もある。(図11)

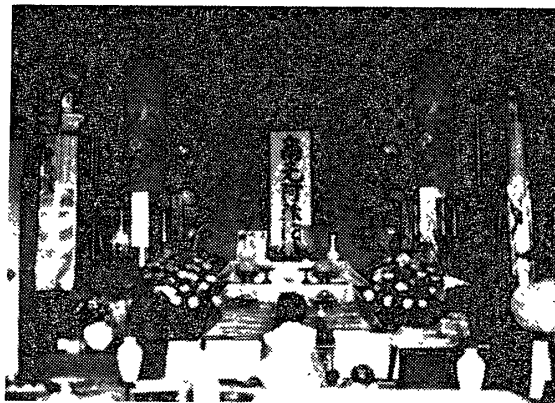


図10 新盆の盆棚

北設楽郡では午後2時頃、組頭の人を中心に供養が行なわれる。また、「ハネコミ」と呼ばれる念仏踊りがあるが、(図12)飯田にはない。また天竜川の2か所(時又、市田)では灯籠流しが行なわれる。

15. 神道の家の盆行事

神道の家でも13～15日に霊をまつるが、特別な棚は設けず、仏教の家よりも簡単である。迎

え火はたく家もたかない家もある。

神棚をきれいにして位牌の「おさや」をとって並べ、ろうそくに火をともし、そしてお洗米、塩、お神酒、さかきの他に、御飯・魚・野菜・果物等を土器に入れ、三方にのせて供える。

新盆等の特別な行事はなく、10日祭、20日祭、1周忌等がある。親戚同志でも新盆見舞には行かない。



図11 108 タイ（ろうそく）と線香を立てる砂山



図12 ハネコミ（北設楽郡設楽町）

おわりに

愛知県北設楽郡の年中行事は年々簡略化の傾向にあり、個々の家による差が甚だしい。しかし何れの家も最も多く残され実施されているのは正月行事と盆行事である。そこで北設楽郡と比較するために、三州街道によってつながれていた飯田地方の盆行事をとりあげた。ススキ等でゴザを編んだり、ナスとミソハギの水向け等共通点も多く、盛んに交流が行なわれていた事がうかがえる。しかし、棚を作る場所や迎え火に使う物等多少地域差が見られ、全体的に飯田地方の方が簡略化されている。また、新盆のハネコミ、16日の川原めし等は昔から行なわれていない。

飯田地方では、産業の変遷や衛生管理の面から、特に昭和20～30年（1945～1955）頃から簡略化が進み、旧市も後に合併した新市も相違はあまりみられない。しかし、時代は変わっても、祖先の霊を慰める盆行事は今後も継承されていくであろう。

終りに、本調査にご協力いただいた飯田市教育委員会ならびに資料を提供下さいました諸氏に深謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 鈴木棠三：年中行事辞典，角川書店（1978）
- 2) 向山雅重：日本の民俗 長野，第一法規（1975）
- 3) 磯貝勇，津田豊彦：日本の民俗 愛知，第一法規（1973）
- 4) 信濃毎日新聞社：長野百科辞典，信濃毎日新聞社（1981）
- 5) 飯田市教育委員会：ふるさと飯田の民俗，飯田市教育委員会（1980）
- 6) 飯田市史編纂会：山都飯田，飯田市役所（1956）
- 7) 柳田国男 他：伊那，308，伊那郷土史学会（1954）
- 8) 村沢武夫 他：伊那，333，伊那郷土史学会（1956）
- 9) 関島久夫 他：伊那，381，伊那郷土史学会（1960）